

仙台文学館ニュース

第十八号

Sendai Literature Museum News



住宅地を見下ろす仙台大観音

観音像

文学のある風景

窓の外は、丘陵地に広がる住宅地帯になった。新しい家がびっしりとなだらかな稜線を埋めている。

「この辺りは特にこの噂が流行ったところですよ」聞き流しながら整然とした町並みを見ているうちに、多佳雄は前方に現われたものを見てきよっとした。

「なーなんだね、あれは？」

大きなカーブを回った瞬間、空の中に巨大な白い人影がそびえていた。相当な大きさだ。

「観音様ですよ」

「観音様？」

「ええ。信心深い人たちが建てたらしいんですが、何せあの大きさですよ。びっくりしますよね」

「有り難いというよりも、はっきり言って怖いね」確かに観音菩薩だ。まだ新しいらしく、白い石が青空に眩しい。何か妙につきりしているというか、生々しい感じがする。ようやく視界から石像が消えた。なんとなくホッとする。

「これから走るところが、この辺りでも一番新しい住宅地ですよ」貝谷が解説する。規則正しく並んだ街路樹が見えてきた。真新しい道路のアスファルトがくっきりと目に飛び込んでくる。やがて多佳雄はあつげにとられた。これは何調というのだろうか——アーリーアメリカンスタイルというべきなのか、山小屋風とでもいうべきなのか。パステルカラーの家がずらりと並んでいた。白いベランダに出窓、花いっぱいプランターボックスが埋める庭。やはり真新しい公園には子供たちが遊び、若い母親たちがお喋りをしている。

(恩田陸「魔術師」)



『象と耳鳴り』『魔術師』所収(祥伝社)

小池 光の 気になる日本語

7

「思う」

「われ思う、ゆえにわれあり」

という哲学者デカルトの有名な言葉がある。「思う」は考える、思索するという意味である。他の誰でもないじぶんのあたまで考え、思索することはじめて人は人となるのだ、というメッセージだ。ところで、「思う」には、こういう意味でない一面がある。いや、その方が多い。表現をやわらげ、ぼかす時に用いられる。格別考えているわけではなく、まして思索しているわけではなく、ただ言い回しをやわらかくするために最後に「思う」をくっつける。

ある人が意見を述べた。じぶんの意見はそれと違う。こういうとき、

「それは、違う」

という断定がきつすぎ、人間関係に支障が出ることを恐れる。それで、

「それは、違うと思う」

とぼかすわけである。すると、わたしは違うと思うが、あなたのような考えもあるかもしれない。：のようなニュアンスが生じて相手の顔が立つ。日本語はこういうぼかしの表現が実に豊富にある。前後にいろいろな語をくっつけて融通無碍にぼかす。

「それは、違うようにも思う」

「それは、違うようにも思えない」

「それは、違うように思えないことのないようにも思う」

と、どんどんぼかしてはかしかかかってゆく。ぼかしの主役が基本動詞「思う」であり、ここではデカルトの名言における「思う」の意味は、ますますたぐない。

全然意味の違うことを一個の「思う」が担っているのはなかなか厄介である。考えないで、ぼかすことが思うことだと、思ってしまう。

こういうとき苦肉の策ではあるが、思考、思索のそれを「思う」と漢字で書き、表現のクッション材としてのそれを「おもう」と平仮名で書く手がある。「思う」と「おもう」を意識して使い分ける。「違うと思う」でなく「違うとおもう」と書く。平仮名はやわらかいから、クッションとしてより有効と「思う」。

エッセイならまだいいが、評論を書くとき文尾に「思う」をくっつけると、腰がふらついて見えてグレイドが下がる。しかし、立言に自信がないとき筆が滑ってつい「思う」とつけてしまう。発言ではなおさらだ。麻生前総理が政権末期に、失言を警戒してかインタビューで「思う」を連発していた。腰が低いというよりも自信なきげに見えた。

(仙台文学館館長)

学芸室日記

○本作りワークショップ
雑誌「仙台学」を発行する編集社荒蝦夷のスタッフを講師に迎え、9月から始まったゼミナール。初めて出会った者同士が、仙台の文学に関する1冊の本を作ります。参加者は、企画を立て取材をし、原稿を書くだけでなく、印刷・製本過程を見学し、また販路を開拓するなど、文字通り「本作り」の現場を体験します。本は2010年秋完成予定です。ごうご期待。



○2つのライブ文学館
11月13日、21日の両日、味わいの異なる「ライブ文学館」を開催しました。13日は「松本清張特集<一年半待て>」。女優の市原悦子さんが、仙台のピアニスト榎原光裕さんの演奏を交えて「一年半待て」を朗読。初顔合わせのお二人でしたが、息はぴったり。



終了後、ホッとした面持の市原さんと榎原さんは携帯で記念撮影をするひとこまも。続く第二部は、文芸誌「海」元編集長の宮

田穂栄さんと小池光館長の対談。清張の創作現場に立ち会ってこられた宮田さんのお話に心を動かされたのか、当日販売していた本はほぼ完売しました。

21日は「映像とトークでおくる絵本のひととき」。歌人の俵万智さんと絵本作家のよたかずひこさんが、子育てをとおして出会った絵本について対談をしました。喫茶店で話し込む二人という設定で、会場のせんだいメディアテークの「クレスキール・カフェ」の



スタッフの方に、ステージ上でのオーダーをお願い。とまどいなながらも、堂々と演じて下さり、その演出はお客様にも好評でした。

○赤鉛筆
11月23日で終了した松本清張展。約300点の資料の中に、校正に使ったという赤鉛筆がありました。よく見ると、焼け焦げが…。文藝春秋の編集長だった半藤一利さんのお話によると、清張はケラに何度も手を入れる編集者泣かせの作家だったとのこと。好きな煙草を片手に、赤を入れる清張の姿をふと想像しました。



太宰治「魚服記」

私が代表を務めている「ことばの杜」は、「子どものことば」を育てることを目標に、私とほぼ同じ時期にNHKを定年退職したアナウンサーが集まって作った組合だ。様々な活動をしているが、その中の大きな柱の一つは朗読である。これまで活字で記録されてきた優れた文学作品を、「声」で記録する朗読アーカイブを行っている。日

本語のリズムや音の響きの美しさ、そして人間の肉声の温もりを、幼い心に刻んでおいて欲しいと思うから。

そして今、私たちが一番力を入れてるのが、子どもたちの「話しことば」を育てるための教材開発だ。読み書きが中心だった日本の国語教育だが、話し言葉の教育も始まってはいる。しかし各地の小学校などをまわっ



てみると、スピーチやディベートの授業が多いようで、子どもたちの発表能力は昔に比べ格段に高まっている。だが、日々の暮らしの中で、隣の人とどう心を通わせるのか、周囲の人々と良い関係を築くためのことばが育っていないように感じる。生きていく上で最も必要な人間力としての「話しことばの力」をどうすれば育てることができ

るか。
東京学芸大学の先生や、附属小・中学校の先生たちと話し合いを続けたが、これという決定的な答えは出ないまま、ともかく学校での「話しことば教育」に一步踏み出すために、まずは「朗読教材」のDVDを制作した。

「話しことば教育」に朗読？と疑問に思う方も多いことだ

う。一人黙読する普通の読書と朗読には、大きな違いがある。普通の読書でも、作者の意図を読み取ることは大切だが、朗読の場合、徹頭徹尾、正確に深く読み取り、自分の中で咀嚼し、それを聞き手に「伝え」なければならぬ。それは、相手のことばからその心を読み取り、自分の思いをことばにして、相手に伝えるという、「話しことば」の作業と全く同じなのだ。朗読の方法を教えることは、子どもたちの話しことばを育てることにつながるはずだ。

二〇〇九年は太宰治生誕百年というところで、「ことばの杜」としても太宰作品の朗読を度々行い、朗読CDも制作した。私自身も「魚服記」「斜陽」「ヴィヨンの妻」「津軽」「カチカチ山」などの作品を朗読した。

若いころから太宰を愛読してきたつもりだが、朗読するために再読すると、新たな発見や驚きがあり、これまで私は何を讀んでいたのかと情けなくなることもあった。とりわけ「魚服記」。恥ずかしながら、少女時代に読んだときには、この作品はよく分からなかった。今だって、分かっているかといえれば怪しい。確かなのは、今はこの不思議な作品世界の味わいに、こよなく惹かれていくということだけだ。

しかし昨年朗読するために読んだ最初のときには、なぜ第一章の冒頭に、物語の本筋とはあまり関係がないように思える、植物採集に来る学生の話が置かれているのか訝しく思った。ご存知の通り「魚服記」は、津軽の山奥の滝壺の傍で、炭焼きの父親と二人だけで暮らす少女・スワの変身譚。文庫本にしてほんの12ページほどの短編だが、4章に分けられている。滝の様子や山の四季が丁寧に描かれ、きこりの兄弟の民話風

仙台に生まれる 新しい演劇のかたち

2008年からスタートした「杜の都の演劇祭」は、仙台市内のカフェや飲食店など様々な空間を会場に、小説や戯曲をリーディング形式でお届けする試みです。第2回目となる2009年は、仙台文学館の開館10周年記念事業として、初代館長・井上ひさしがセレクトした8演目を11月から12月にかけて上演。井上作品のほかに、宮澤賢治、石川啄木、太宰治といった東北が輩出した作家や、現在活躍中の伊坂幸太郎の作品が、個性豊かな演劇人たちによって、様々な形で「劇化」されました。

そのうちのひとつ「金!〜評伝で綴る啄木〜」は、後世に残る数々の短歌を残して夭折した歌人・石川啄木の生涯を、啄木の年譜と作品・友人の評伝・妻の手紙などで構成するオリジナルプログラム。映像作家のクマガイコウキ氏の作・演出により、青葉通の「晩翠草堂」で上演されました。



左より 望月はるか(節子)、角田哲哉(啄木)

クマガイさんがこの会場を選んだ理由は、借金の名手だった啄木が、晩翠に金を無心したというエピソードから。「たはむれに母を背負ひて/そのあまり軽きに泣きて/三歩あゆまず」のような哀愁と悲壮感の漂う従来の啄木のイメージだけではなく、人間・啄木の生き様そのものを演出して見せてくれました。

そしてこの「杜劇祭」のもう一つのお楽しみは、おいしい食事やデザートをいただきながら、リーディングに耳を傾けること。このプログラムでは、仙台文学館の喫茶「杜の小径」の三山店長自ら出向き、マチネでは「お饅頭と炭火焙煎のコーヒー」、ソワレでは「はっと汁」がお客様に振舞われて、大好評でした。

戦後間もなく建てられた「晩翠草堂」は今では懐かしさも感じさせる日本家屋。11月ともなると底冷えのする空間でしたが、終生貧しさから逃れられなかった啄木とその妻・節子は、これよりもさらに寒い部屋で暮らしていたかと思うと、啄木が残した数々の作品と、それらが生まれた背景に、改めて思いを馳せた1時間でした。



な物語などを織り交ぜながら幻想的な世界が展開されるのだが、冒頭に現れた学生は第一章で滝壺に沈められたまま、それきり二度と姿を見せないのだ。借越ながら、第一章は省いても良いのではないかとさえ思った。黙読・斜め読みでは、その程度の読解しきれないのだと、後になって深く反省するのだが...

そこに唐突に「スワはそんな苦を眺めることに、たった一人のともだちのことを追想した」という文章が続く。え、たった一人のともだちって誰? 黙読で流し読みしたときには見逃していた一語に、ひっかかる。民話の中、きこりの兄弟の他には、父親とスワしか登場しない物語だ。第一章で滝壺に沈んだ「植物の採集をしにこの滝へ来た色の白い都の学生」こそが、スワのたった一人の「心の」ともだちだったのかと、ようやく気づくのだ。第一章は決して省くことなどできない重要な伏線になっていたわけだ。

斜め読みの粗雑な読書で「たった一人のともだち」の一語など読み逃がしたまま、読んだつもりになっていた。この作品の奥深い魅力を理解していなかった。この一語にこれほどの意味が籠められていたのかと、黙読では気づけなかった作者の意図を発見させてくれる、朗読の効用の大きさに気づく。こうして作者の思いをできるだけ深く読み取り、それを聞き手にきちんと伝えるための読み方を考え、朗読する作業。これが子どもたちの「話しことば」を育てる上でも、何らかの養いにならないはずはないと思うのだ。

山根基世 (やまね もとよ)
ことばの杜代表、フリーアナウンサー
1948年、山口県生まれ。1971年、早稲田大学文学部卒業。同年NHKに入局。女性手帳、ニュースワイド、関東甲信越・小さな旅、ほんさむウーマン、土曜・美の朝、新日曜美術館、ラジオ深夜便などを担当。NHKスペシャルのナレーションでは、「人体」や「映像の世紀」シリーズのほか、「里山」など多数担当。2005年、アナウンサー室長に就任。2007年、NHKを退職。「ことばの杜」を設立し、代表を務める。



ライブ文学館

山根基世の

『遠野物語』

二〇一〇年

一月二十三日(土) 14:00開演

仙台市太白区文化センター

栗栗楽ホール

入場料(全席指定)2,000円

仙台文学館、イズミティ21、

仙台市民文化事業団、藤崎

にて発売

*未就学児入場不可

『遠野物語』一〇〇年の記憶

—佐々木喜善と仙台

二〇二〇(平成22)年は、岩手県遠野の人・佐々木喜善が語り、民俗学者柳田國男が記した『遠野物語』の発刊から一〇〇年を迎える記念の年です。

3月22日(祝)まで開催する本展では、喜善の足跡を軸に、二〇〇年を経てなお読み継がれる『遠野物語』の魅力あふれる世界をご紹介します。

佐々木喜善



【聴耳草紙】

さて読みはじめ申候、かつて私の口よりお話し上げし事のある物語ともおぼえず、さながら西洋の物語にも見る心地いたされ候(中略)如何にしてかくの如きと思ふほど、私の思つてみた通り、そのまゝの心持にて活字が物語り、なほ私の思ひの行き及ばさりし節々までも行きわたり、それにて再びと、私は村の人に就いてかの物語をきくのと、ちつとも変らざる興味と心行く境に導かる、思ひを味ひ申候。

(柳田國男宛書簡 明治43年6月18日)

佐々木喜善(ささき きぜん)

1886(明治19)年～1933(昭和8)年

岩手県遠野生まれ。祖父の影響から伝説や郷土史への興味を持ち、また幻想的な泉鏡花の作品に惹かれ、文学を志す。石川啄木や宮沢賢治など、多くの詩人や作家と交友を持つ中、1908(明治41)年、柳田國男に遠野の昔話を語る。晩年は仙台に居を移し、「東北土俗講座」の開催や、昔話をまとめた『聴耳草紙』の出版など積極的に活動するが、病のため急逝する。

柳田國男



柳田國男(やなぎた くにお)

1875(明治8)年～1962(昭和37)年

兵庫県生まれ。東京帝国大学在学中、田山花袋、島崎藤村らと交流をもち、すぐれた抒情詩を発表。卒業後、農商務省に勤務するかたわら、民俗学への関心を深める。1919(大正8)年、職を辞した後は、民俗学に専念することを決心し、1935(昭和10)年、民間伝承の会を設立、日本民俗学の父とよばれる。1951(昭和26)年、文化勲章を受章。

この話はすべて遠野の人佐々木鏡石君より聞きたり。昨明治四十二年の二月頃より始めて夜分折々訪ね来たりこの話をせられしを筆記せしなり。鏡石君は話上手にはあらざれども誠実なる人なり。自分もまた一字一句をも加減せず感じたままを書きたり。思うに遠野郷にはこの類の物語をお数百件あるならん。我々はより多くを聞かんことを切望す。国内の山村にして遠野よりさらに物深き所にはまた無数の山神山人の伝説あるべし。願わくはこれを語りて平地人を戦慄せしめよ。この書のごときは陳勝呉広のみ。

※佐々木喜善の筆名
(『遠野物語』序)

“遠野物語”より

川童

小鳥瀬川の姥子淵の辺に、新屋の家という家あり。ある日淵へ馬を冷やしに行き、馬曳の子は外へ遊びに行きし間に、川童出でてその馬を引き込まんとし、かえりて馬に引きずられて厩の前に来たり、馬槽に覆われてありき。家の者馬槽の伏せてあるを怪しみて少しあけて見れば川童の手出でたり。村中の者集りて殺さんか有さんかと評議せしが、結局今後は村中の馬に悪戯をせぬという堅き約束をさせてこれを放したり。その川童今は村を去りて相沢の滝の淵に住めりという。

オシラサマ

昔ある処に貧しき百姓あり。妻はなくて美しき娘あり。また一匹の馬を養う。娘この馬を愛して夜になれば厩舎に行きて寝ね、ついに馬と夫婦になれり。ある夜父はこの事を知りて、その次の日に娘には知らせず、馬を連れ出して桑の木につり下げて殺したり。その夜娘は馬のおらぬより父に尋ねてこの事を知り、驚き悲しみて桑の木の下に行き、死したる馬の首に縋りて泣きいたりしを、父はこれを悪みて斧をもつて後より馬の首を切り落せしに、たちまち娘はその首に乗りたるまま天に昇り去れり。オシラサマというはこの時よりなりたる神なり。



曲り家

ザシキワラシ

旧家にはザシキワラシという神の住みたもう家少なからず。この神は多くは十二三ばかりの童児なり。折々人に姿を見することあり(中略)この神の宿りたもう家は富貴自在なりということなり。



オシラサマ



カッパ淵

民話のふるさと

遠野では、『遠野物語』を核にした、「民話のふるさと遠野」づくりに力をいれています。その取り組みは「語り部」と呼ばれる方たちが支えています。



遠野の「語り部」の第一人者、正部家ミヤさん



*展示室では、昔話をお聞きいただけます。(会期中の土・日を予定)



展示室風景



『遠野物語』原稿



『遠野物語』初版

『遠野物語』
遠野に伝わる、人間と、山の神や天狗、川童などが関りあう不思議な話を、山村に息づく「目前の出来事」二現実の事実」として記録したものです。佐々木喜善によって語られ、柳田國男が編纂しました。一九一〇(明治43)年、柳田の自費で三百五十部出版され、日本民俗学の誕生を告げる記念碑的作品として知られることとなりました。

こまつ座第八十九回公演

仙台文学館
おすすめ
ステージ

「シャンハイムーン」

二〇〇九年九月の「兄おとうと」に引き続いて、井上ひさし・初代仙台文学館館長の作品「シャンハイムーン」が、仙台で上演されます。主人公である中国の作家・魯迅が、人生の転機を迎えた「仙台」での公演をどうぞお見逃しなく。

仙台公演にむけて

井上ひさしには、世界の文豪をテーマにした作品が三つあります。一つはイギリスのシェイクスピア全作品をもちこんだ「天保十二年のシェイクスピア」、一つはロシアのチェーホフの生涯を描いた「ロマンス」、もう一つが中国の文豪魯迅を描いた「シャンハイムーン」です。



村井国夫 (魯迅)

「シェイクスピア、チェーホフ、魯迅。この三人の中で、来日した文豪は？」仙台の方には、釈迦に説法ですが、もちろん魯迅です。魯迅は若き日に「冬はひどく寒かった」という仙台に留学。当時の師を「藤野先生」という小説に書き、親しまれております。では、「シャンハイムーン」には仙台時代の魯迅がどのような姿で登場するのでしょうか？ どうぞ、お楽しみください。

(こまつ座 渡辺昭夫)



有森也実 (許広平)

魯迅と仙台

父親を病気で亡くした体験から、西洋医学を学ぶために、官費留学生として来日。同胞が一人もいない仙台医学専門学校に、一九〇四(明治37)年9月から一九〇六(明治39)年3月まで、約一年半在籍する。異国での慣れない生活に苦勞しながらも、解剖学の藤野厳九郎教授の親身な指導を受け熱心に学ぶ。ある時講義後に映写された、中国人の処刑現場の幻灯に衝撃を受け、肉体より精神を改革すべきであると考えて、医学から文学への転換を図る。日本を去る際に、藤野先生から贈られた「惜別」と書かれた写真を、魯迅は大切にしていたという。



仙台医学専門学校

「シャンハイムーン」では「こころの負債」の一つとして、敬愛する師の信頼を裏切ったという自責の念が描かれる。



藤野厳九郎写真。裏に「惜別」と記されている

もう一つの魯迅物語 太宰治『惜別』

一九四四(昭和19)年、内閣情報局と日本文学報国会の依頼により、「独立親和」を主題として執筆。魯迅の「藤野先生」を軸に、魯迅が、医学から文学に志を変えた心の動きを、同級生だった老医師という第三者の視点から描かれる。

執筆にあたり太宰は来仙し、地元新聞社や当時を知る人物を訪れ、資料蒐集に努めた。
※二〇一〇年春 太宰治展(仮称)を開催予定



太宰治『惜別』
昭和20年9月
朝日新聞社

仙台公演 情報

2010年4月19日(月)
イズミティ21大ホール
[開場] 18:00 [開演] 18:30

全席指定 SS席6,500円、
S席5,500円、A席4,500円、
B席2,000円

*当日500円増、友の会割引有り。
未就学児入場不可

チケットは仙台文学館、イズミティ21、仙台市青年文化センター、10-box、藤崎、仙台リビング新聞社で発売。



魯迅 明治37年頃

仙台・宮城の博物館・文化施設が連携

「仙台宮城ミュージアムアライアンス(SMMA)」

去る11月22日、青葉区錦ヶ丘にある仙台市天文台で、仙台市天文台と仙台市博物館のスタッフによるクロストーク(対談)「天文学の今と昔」が開催されました。

主催したのは、発足したばかりの「仙台宮城ミュージアムアライアンス(SMMA)」です。

仙台とその周辺には優れた文化施設が数多くあります。これらの施設が連携して、分野を超えてそれぞれの持つ貴重な知的文化資源や情報を出会うことで、何倍にも活用していくというのがSMMAの狙いです。現在参加しているのは11館園で、仙台文学館も参加しています。

「政宗と天文」というテーマから始まったトークでは、仙台市博物館に収蔵されている武器

をはじめ、珍しい天体望遠鏡や美術品が次々とスライドで紹介され、天文学と歴史学の両方向から光が当てられました。

「伊達政宗の兜の前立が三日月型なのは、政宗の誕生日8月3日に因んだと推測される。旗印の日輪と相まって、日月、すなわち宇宙全体をシンボルとした気宇壮大なもの」

「旧暦では日付と月齢が一致するが、この細さでは月齢2かそれ以下。左右が非対称なのも天文学的にはありえないが、それも「美学」なのだろう」

異なる視点の出会いがもたらす知的興奮で会場はとても盛り上がり、予定の2時間を超えても参加者からの質問は止まらなかった。



http://www.smma.jp/
SMMAのホームページ「見験楽学」

もっと楽しくもっと学べるミュージアムを目指して。SMMA

シリーズで行なわれるこのクロストークで、仙台文学館は宮城県美術館とクロスします。宮城県美術館には「気まぐれ美術館」のエッセイで知られる、作家・美術評論家だった洲之内徹のコレクションが納められています。作家の佐伯一史さんは、当館のゼミナール「芥川賞を取らなかった名作たち」で、洲之内徹を取り上げその作品の魅力を読み解きました。トークでは有川幾夫・宮城県美術館副館長と佐伯さんが、文学と美術の双方から、洲之内の審美眼に迫ります。

(2010年2月7日 13:30より 宮城県美術館にて)



小石川正弘さん
(仙台市生涯学習課天文台係長)
「博物館の史料を見ていると、昔の天文学者たちがどんな思いで空を眺め、どのようにそれを記録してきたのか、興味がわき立てられます」



内山淳一さん
(仙台市博物館学芸室長)
「皆さんもこれを機会に天文台と博物館を行ったり来たりして、400年いやそれ以上続いていた天文学とはどのような学問なのかを実感してください」

コラム

文学館の住人たち - その4 -

問) これは何でしょう。

答) 入口の床の「木タイル」です。緑豊かな敷地、近代的なコンクリートの建物、文学資料の息づかい。それらをつなぐ第一歩を床のデザインに表わした建築家の思いがこめられています。歩く音がちょっと楽しく、時に賑やか・・・気持ちに呼応するような、木のぬくもりを足元から感じてください。

